

第7回円空大賞

受賞者の選評及び 作家略歴・作品写真



選 評

- | | | |
|------|--------------|-------------|
| 円空大賞 | 加藤 委 | (かとう・つぶさ) |
| 円空賞 | 斎藤 隆 | (さいとう・たかし) |
| 円空賞 | 田辺 小竹 | (たなべ・しょうちく) |
| 円空賞 | 藤田 昭子 | (ふじた・あきこ) |
| 円空賞 | ユーリー・ノルシュテイン | |



第7回円空大賞の選評

選考委員長 梅原 猛

第7回を迎えた円空大賞は、それぞれ孤独に創造の道を歩む芸術家が受賞者に選ばれた。毎回、受賞者には外国人作家と地元の作家がそれぞれ一人以上選ばれることになっているが、今回、地元作家が初めて大賞受賞者となった。5名の受賞者はいずれも甲乙つけがたいすぐれた作家であるが、若い加藤委氏の豊かな才能を評価するとともに、その将来を期待して大賞受賞にふさわしいと考えた。

円空大賞 加藤 委 (かとう・つばさ)

加藤委氏は、多治見市で桃山時代から続く陶家に生まれ、多治見市陶磁器意匠研究所で学び、ずっと地元で青白磁を中心とする作品を作り続けている陶芸家である。磁土を荒々しく引き伸ばした作品や、鋭いナイフで切り落としたような面取の作品が特徴的であるが、そこにはあたかも研ぎ澄まされた日本刀のような殺気すら感じられる。そしてその殺気は清潔きわまるものであり、品格高い作品となっている。このような作品は公募展では見られないものであろう。作者は、円空の如く孤独に徹して創造の道を一途に歩んでいるのであろう。円空大賞受賞がこの作家のいっそうの活躍の契機になるとともに、陶芸の伝統ある多治見の地で活動する若い芸術家への刺激になることを期待するものである。

円空賞 斎藤 隆 (さいとう・たかし)

斎藤隆氏は円空と同じく放浪する芸術家である。氏は最近、和紙に墨一色で不思議な人間の像などを描く。それは一見、寒山拾得のような人物に思われる。氏の描く人間は寒山拾得よりはるかに暗いが、その底に奇怪で深いユーモアをたたえている。芭蕉の如く「奥の細道」をゆく旅人である氏は、人間の原形を必死で追求しているように思われる。氏の描く朽ち木や魚の頭も、存在そのものの不気味さを物語っている。氏は好んで掌を描くが、それは人体から離れた一体の生き物のようである。

円空賞 田辺 小竹(たなべ・しょうちく)

田辺小竹氏は日本を代表する竹工芸作家であるといつてもよい。氏は工芸品としてのみごとな作品を作るばかりか、従来の竹工芸の枠を超え、竹でもって独創的な世界を創り出す。竹は『竹取物語』で語られるほど古くから人々に神秘性を感じさせる植物であるが、氏は、天と地をつなぐ哲学的魂を竹に感じているようである。竹は天と地をつなぐとともに、人と人をつなぐ。氏の創る竹の世界は甚だ華麗でダイナミックである。

円空賞 藤田 昭子(ふじた・あきこ)

藤田昭子氏の造形作品は独創的であるといえる。氏は神の如き世界の創造者である。その作品は巨大であり、そこに多くの穴がある。穴はいったいどこへつながっているのか。またさまざまな迷路のような構造をもつ作品があるが、氏は迷路に自己の人生を重ね合わせたのであろうか。私はこのような作品に荘子の語る「混沌」を思い起こした。氏は愛知県常滑の天竺山で靈感を得たと語るが、その作品も陶芸の伝統のある常滑の地霊が生み出したものであろうか。そのような穴のあるさまざまな不思議な世界を氏は果てしなく作り続ける。

円空賞 ユーリー・ノルシュテイン

アニメーション作家のユーリー・ノルシュテイン氏は端倪すべからざる芸術家である。氏は動物などを主人公とする短いアニメーションを作るが、それは現代世界への鋭い風刺を盛り込みつつ、人間愛にあふれた作品である。そこに含まれた寓意は一度見るだけでは容易に分からず、二度、三度と見ることによってますます深い寓意が理解される。氏は、子どものころの夢をいつまでも見続けている詩人でありながら、ゴーゴリの小説やバッハの音楽を深く理解する哲学者でもある。今回、このような国際的芸術家を受賞者に選ぶことができたのは幸甚である。



かとう・つぶさ

加藤 委

Tsubusa Kato

国	籍	日本:岐阜県 生まれ
生	年	1962年
職	業	陶芸家

選 評

加藤委氏は、多治見市で桃山時代から続く陶家に生まれ、多治見市陶磁器意匠研究所で学び、ずっと地元で青白磁を中心とする作品を作り続けている陶芸家である。

磁土を荒々しく引き伸ばした作品や、鋭いナイフで切り落としたような面取の作品が特徴的であるが、そこにはあたかも研ぎ澄まされた日本刀のような殺気すら感じられる。そしてその殺気は清潔きわまるものであり、品格高い作品となっている。このような作品は公募展では見られないものであろう。作者は、円空の如く孤独に徹して創造の道を一途に歩んでいるのであろう。

円空大賞受賞がこの作家のいっそうの活躍の契機になるとともに、陶芸の伝統ある多治見の地で活動する若い芸術家への刺激になることを期待するものである。

作家略歴

1962	多治見市小名田町に生まれる
1979	多治見市陶磁器意匠研究所 修了
1986	尼ヶ根古窯発掘調査参加、「尼ヶ根古窯保存運動展」
1989	初個展 (サボア・ヴィーブル・東京都) 加茂郡富加町川小牧に移住し薪窯築窯
1996	「凜・現代の陶芸美展」(滋賀県立陶芸の森) 「磁器の表現・90年代の展開」(東京国立近代美術館) 「現代陶芸若き旗手たち」(愛知県陶磁資料館)
1999	「ファエンツァ、愛知、ソウル展」(コンテンポラリー セラミック アーツ・韓国) スライドレクチャー、ワークショップ (ソウル産業大学・韓国)
2002	「現代陶芸の100年展」(岐阜県現代陶芸美術館)
2003	「白磁・青磁の世界展」(茨城県陶磁美術館) 金沢・世界工芸フォーラム2003 (石川県)
2004	「心のかたち・暮らしのかたち展」(岐阜県美術館) 「ミノ・セラミックス・ナウ展」(岐阜県現代陶芸美術館) 「行為する日々 - 加藤委・金憲鎬展」(新世紀工芸館・愛知県瀬戸市) 「『陶磁』日本陶磁伝統と前衛」(フランス国立陶磁器美術館)
2006	「第2回パラミタ陶芸大賞展」(パラミタミュージアム・三重県)
2007	美濃茶会 (神言会多治見修道院・岐阜県)
2008	北の丸大茶会 (東京国立近代美術館工芸館)
2010	「交差する視点とかたち」(札幌芸術の森美術館・北海道)
2012	「ミノ・セラミックス・ナウ」(岐阜県現代陶芸美術館)



「サンカクノココロ」2012年

青白磁
50 x 50 x 50cm



さいとう・たかし

齋藤 隆

Takashi Saito

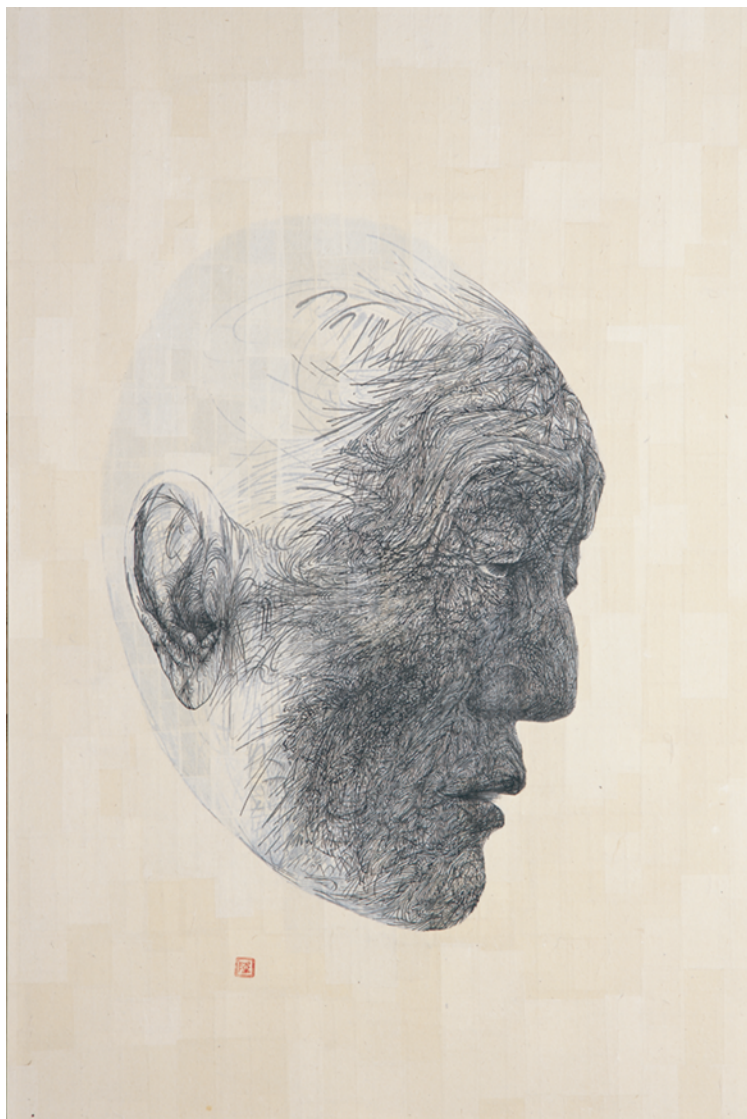
国	籍	日本:東京都 生まれ
生	年	1943年
職	業	画家

選 評

齋藤隆氏は円空と同じく放浪する芸術家である。氏は最近、和紙に墨一色で不思議な人間の像などを描く。それは一見、寒山拾得のような人物に思われる。氏の描く人間は寒山拾得よりはるかに暗いが、その底に奇怪で深いユーモアをたたえている。芭蕉の如く「奥の細道」をゆく旅人である氏は、人間の原形を必死で追求しているように思われる。氏の描く朽ち木や魚の頭も、存在そのものの不気味さを物語っている。氏は好んで掌を描くが、それは人体から離れた一体の生き物のようである。

作家略歴

1943 東京都足立区に生まれる。
 1958 都立江北高校・定時制を1年で中退
 1963 「読売アンデパンダン展」(東京都立美術館)
 1970 「日本現代美術展」(ステンフリーギャラリー・ニューヨーク)
 1975 第3回山種美術館賞展に推薦出品(第4回、第5回出品)
 1976 第2回从展招待出品
 1984-1993 「横の会」に参加(第10回まで出品)
 1988 「日本画と現代」(福島県立美術館)
 1989 「地・間・余白」(埼玉県立近代美術館)
 1990 「日本画・現代の視覚-その模索と実験」選抜出品(新潟市美術館)
 1991 「福島的美術家たち」(福島県立美術館)
 「みちのくの造形-人のかたち-」(宮城県美術館)
 1992 個展「齋藤隆大作展」(アトリエ美術展示ホール・秋田県)
 1993 「異形のFigure-東北の3人」(宮城県美術館)
 1995 「モノクローム(白と黒)」(喜多方市美術館・福島県)
 1998 「日本画-純粹と越境」(練馬区立美術館・東京都)
 「黒の余韻」(いわき市立美術館・福島県)
 2004 「現代の水墨画2004」(富山県水墨美術館)
 個展「東北をえらんだ作家 齋藤隆展」(リアス・アーク美術館・宮城県)
 個展「墨聲紙韻 Takashi Saito」(M.Y.ART PROSPECTS・ニューヨーク)
 2005 「古い-老いをめぐる美とカタチ」(福島県立博物館)
 2009 個展「墨聲紙韻齋藤隆」(喜多方市美術館・福島県)
 2010 「25年目の贈り物」(福島県立美術館)
 2011 「今・美術の力で-被災地美術館所蔵作品から」(東京藝術大学大学美術館)
 2013 個展「分水嶺・齋藤隆」(福島県立美術館)



「貌」 2003年

90 × 60cm
和紙・墨



たなべ・しょうちく

田辺 小竹 Shochiku Tanabe

国	籍	日本:大阪府 生まれ
生	年	1973年
職	業	竹工芸作家

選 評

田辺小竹氏は日本を代表する竹工芸作家であるといってよい。氏は工芸品としてのみごとな作品を作るばかりか、従来の竹工芸の枠を超え、竹でもって独創的な世界を創り出す。竹は『竹取物語』で語られるほど古くから人々に神秘性を感じさせる植物であるが、氏は、天と地をつなぐ哲学的魂を竹に感じているようである。竹は天と地をつなぐとともに、人と人をつなぐ。氏の創る竹の世界は甚だ華麗でダイナミックである。

作家略歴

- 1973 大阪府堺市に三代田辺竹雲斎の次男として生まれる。
- 1999 東京藝術大学 美術学部彫刻科卒業
- 2002 個展「Connection」(NY Cortland Jessup Gallery・USA)
- 2006 「Golden week on Japanese Art」招待出品・講演(シアトルアジア美術館・USA)
- 2007 「Beyond Basketry」招待出品・講演(ボストン美術館・USA)
「COTSEN bamboo prize」受賞(サンフランシスコ アジア美術館・USA)
- 2008 「New Bamboo」(ニューヨーク ジャパンソサエティ・USA)
国際交流基金日本文化紹介派遣事業において南米三カ国にて竹工芸の講演・ワークショップを開催(ペルー、ボリビア、エクアドル)
個展「田辺小竹襲名展」(大阪高島屋・大阪府)
大英博物館作品買い上げ
「Asian Art in London」(ギャラリー21・イギリス)
- 2009 「Modern Master」バイエルン賞 受賞(ドイツ)
- 2010 個展「Connection-」(高島屋ギャラリー・東京都)
個展「田辺小竹展」(ジェイアール名古屋タカシマヤ・愛知県、大阪高島屋・大阪府)
- 2011 「Gallery of Prizewinner」(ギャラリー ハンドワーク・ドイツ)
「International Fine Art & Antique Dealers Show」(Park Avenue Armory・ニューヨーク)
「竹のかたち 竹芸の今」(大分市美術館・大分県)
「Art antiques London」(Kensington Gardens・イギリス)
「Collect 2011」(Saatchi Gallery・イギリス)
「JAPAN NEXT EXHIBITION」に内閣府より派遣
(パリ装飾美術館・フランス、MAD美術館・ニューヨーク)
- 2012 「Art Basel 43」(Pierre Marie Giraud gallery・スイス)
「Japanese Bamboo Masters」(MINGEI ARTS GALLERY・フランス)
内閣官房 国家戦略室より「世界で活躍し『日本』を発信する日本人プロジェクト」にて選出され、表彰を受ける。
「竹のインスタレーション 天と地」(正木美術館・大阪府)
第59回日本伝統工芸展 宮内庁買い上げ



「天と地」2012
400 × 400 × 400cm

(撮影：藤原 次郎)



ふじた・あきこ

藤田 昭子 Akiko Fujita

国	籍	日本:東京都 生まれ
生	年	1933年
職	業	彫刻家

選 評

藤田昭子氏の造形作品は独創的であるといえる。氏は神の如き世界の創造者である。その作品は巨大であり、そこに多くの穴がある。穴はいったいどこへつながっているのか。またさまざまな迷路のような構造をもつ作品があるが、氏は迷路に自己の人生を重ね合わせたのであろうか。私はこのような作品に荘子の語る「混沌」を思い起こした。氏は愛知県常滑の天竺山で靈感を得たと語るが、その作品も陶芸の伝統のある常滑の地霊が生み出したものであろうか。そのような穴のあるさまざまな不思議な世界を氏は果てしなく作り続ける。

作家略歴

1933	東京都三鷹市に生まれる
1975	野外彫刻(野焼き)「天竺」(愛知県)
1976	野外彫刻(野焼き)「出縄」(神奈川県)
1978	第16回藤村記念歷程賞受賞
1981	第1回琵琶湖彫刻展入賞「波塔」(滋賀県)
1985	野外彫刻(野焼き)「大地の花」(ブラジル)
	野外彫刻(野焼き)「みみずの家」(カナダ)
1985-89	カンピーナス大学美術学部教授(ブラジル)
1986	野外彫刻(野焼き)「つばめの家」(ブラジル)
1988	個展「山脈シリーズ」(東京渋谷パルコギャラリー)
1989	野外彫刻(野焼き)「寄」(神奈川県)
1990	野外彫刻(野焼き)「フレーム・ツリー」(オーストラリア)
1992	野外彫刻(野焼き)「クオバディス」(ドイツ)
1993	野外彫刻(野焼き)「優曇波羅花」(リアスアーク美術館・宮城県)
1995	野外彫刻(野焼き)「フンダリカ」(インド)
1997	野外彫刻(野焼き)「原・集落」(新潟県長岡市国営越後丘陵公園)
1998	野外彫刻(野焼き)「ハマンジアの船」(ルーマニア)
1998-2004	女子美術大学大学院工芸科教授
1999	「開館30周年記念 森に生きるかたち」(箱根彫刻の森美術館・神奈川県)
2002	「森の精三人展」(野外彫刻)
	「牀座シリーズ」(金津創作の森と金津創作の森ギャラリー・福井県)
2005	野外彫刻(野焼き)「富着原」戦没者慰霊の塔(サキマ・アートレジデンス・沖縄県)
2005	個展「牀座」シリーズ(左喜眞美術館・沖縄県)
2011	個展「牀座・遊園シリーズ」(東京上野の森美術館ギャラリー)
現在	神奈川県平塚市にて子どもから大人までの造形教育を1956年より継続



「出縄」1976年

1500 × 600 × 1500cm

(撮影：中島 秀雄)



(撮影:みや こうせい)

ユーリー・ノルシュテイン

ユーリー・ノルシュテイン Yuriy·Norshteyn

国	籍	ロシア
生	年	1941年
職	業	アニメーション作家

選 評

アニメーション作家のユーリー・ノルシュテイン氏は端倪すべからざる芸術家である。氏は動物などを主人公とする短いアニメーションを作るが、それは現代世界への鋭い風刺を盛り込みつつ、人間愛にあふれた作品である。そこに含まれた寓意は一度見るだけでは容易に分からず、二度、三度と見ることによってますます深い寓意が理解される。氏は、子どものころの夢をいつまでも見続けている詩人でありながら、ゴーゴリの小説やバッハの音楽を深く理解する哲学者でもある。今回、このような国際的芸術家を受賞者に選ぶことができたのは幸甚である。

作家略歴

- 1941 ペンザ州ガラブニーシチェンスキー地区アンドレーフカ村で生まれる
(第二次世界大戦戦時下の疎開先で生まれ、1943年にモスクワに戻る)
- 1959 62 サユーズムリトフィルム撮影所の付属コースでアニメーション美術を学ぶ
- 1961 81 サユーズムリトフィルムのアニメーターとなり、ロマン・ダヴィドフ監督の「生きている数字」やレオニード・アマリク監督の「ふたつの物語」、イワン・イワノフ＝ワノー監督の「左利き」にアニメーターとして参加
- 1967 アルカージー・チューリンとの共同監督でアニメーション「25日 最初の日」に着手
- 1971 イワノフ＝ワノーとの共同監督として「ケルジェネツの戦い」を制作
- 1973 「キツネとウサギ」を監督
- 1974 「アオサギとツル」を監督
- 1975 「霧の中のハリネズミ」を監督
- 1979 「話の話」を監督
「キツネとウサギ」「アオサギとツル」「霧の中のハリネズミ」に対して、ソ連邦国家賞を受賞
- 1981 ゴーゴリ原作の「外套」に着手(現在も継続中)
- 1984 アメリカの映画芸術アカデミーと国際アニメーションフィルム協会との共催による国際アンケートによって「話の話」が歴史上、世界最高のアニメーションに選ばれる。
- 1989 アンドレイ・タルコフスキー記念賞 受賞
- 1991 ロシア国営テレビ番組「おやすみなさいこどもたち」のイントロ&エンディング・アニメーションを監督
フランス芸術文化勲章受章
ロシア人民芸術家の称号を授与される
- 1996 「冬の日」発句 (アニメーション作家35名による合作)を監督
- 2003 「ユーリー・ノルシュテイン展～ノルシュテインとヤールブゾワの仕事～」
(三鷹の森ジブリ美術館・東京都)
- 2004 旭日小綬章勲章 受章 (日本)
- 2005 「話の話展」(プーキン美術館) 「冬の日展」(モスクワ東洋美術館)
- 2006-07 「ノルシュテイン絵本づくり展」(ちひろ美術館・東京、安曇野ちひろ美術館)
- 2009 「外套」原画展 (apmg / 武蔵野美術大学内)
- 2010-11 「話の話 ロシア・アニメーションの巨匠 ノルシュテイン & ヤールブゾワ展」
(神奈川県立近代美術館・神奈川県、高知県美術館、三菱地所アレティアム・福岡県、足利市立美術館・栃木県)



映画のためのエスキース「霧の中のハリネズミ」1975年